

■ 巻頭言

「複合アニオン」の頂を目指そう



領域代表 陰山 洋

新学術領域研究「複合アニオン化合物の創製と機能開拓」がスタートしました。複合アニオン化合物は、ほぼ未開と
いってよい物質系ですので新学術の名に相応しいテーマと
確信しています。来年度からは公募研究も加わりますが、
まずは「合成」、「解析」、「機能」からなる計画研究のメンバー
の一人一人が、大きな夢をもち、独自の切り口や思い入れ
を大切にしながら、この未開物質のベールを一つずつ剥が
していただければと願っています。

しかし、複合アニオン化合物の科学は、既存の様々な物
質科学のコミュニティを巻き込んで展開していく新しい分
野であるからこそ、班内・班間で共同研究を推進していく
ことが何よりも大切であると考えています。私はこれまで、
合成、磁性、超伝導、触媒、電池、と物理と化学をまたがっ
て様々な共同研究を経験してきたつもりです。しかし、そ
れでもなお、異分野の研究者の共同研究は容易にはいかな
いことを知っています。計画研究のメンバーは、まさに異

分野の研究者の集合体であり、複合アニオンにはこれまで
の常識が通用しないことも多々有るはずですが、また、サイ
エンス以上に、各コミュニティの「慣わし」が邪魔する可
能性もあります。今までキックオフミーティングを含め本
領域で開催した会議では、お互い遠慮している傾向がある
と感じました。本領域では、「慣わし」は取っ払いましょう。
そのかわりに、「なぜ？」という好奇心を「共通言語」にし
て遠慮なくガンガン議論しましょう。特に、学生を含む若
手には、元気一杯に活躍してほしいと願っています。新し
い学問だからこそ、若い人に大きなチャンスがあると思っ
ています。もちろん、シニアであっても若い気持ちさえあ
れば大丈夫でしょう。

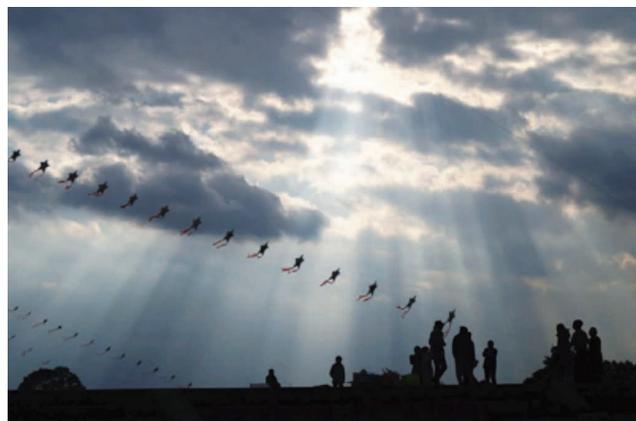
新学術の運営は大変なことも多いですが、嬉しいことも
幾つかありました。三つ紹介します。まず一つ目は、計画
研究のメンバーの中では、「自発的」に共同研究のミーティ
ングが企画されるなど積極的な活動がみられることです（全

員ではありませんが)。少なくとも私はそうですが、大抵のアイデアは失敗に終わります。しかし、大なり小なり5個、10個アイデアを持ち寄って議論し、実際に試してみても初めて気づくことがあったり、失敗であったとしてもブレークスルーに繋がる次の展開が見えたりするのではないのでしょうか。このような自発的な活動が班内・班間でどんどん広がっていくことを期待しています。

二つ目は、昨年9月にオスロで開催されたプロトン伝導体の国際会議 (Solid State Protonic Conductors 18 ; SSPC18) にて、初めて「ヒドリド (H⁻) 伝導」のセッションが設けられたことです。小生は、基調講演としてこのセッション内で講演する機会を与えていただきました。チタン系ペロブスカイト酸化物におけるヒドリドの存在は、20世紀からの大問題で懐疑的な人も多かったと聞きますが、今回のセッションでの活発な議論を通じて市民権を得たと同時に、イオン伝導体としての大きな可能性を参加者とシェ

アすることができました。酸水素化物は、本領域で集中的に取り組む物質ですので大きな励みになりました。

最後に、凝縮系科学賞の第11回受賞者に、計画研究(機能班)の代表の前田さんが選ばれ、12月に神戸大学で開催された第10回物性科学領域横断研究会に合わせて、受賞



講演と表彰式が行なわれました。同研究会と同賞の組織委員は、ともに固体物理学のコミュニティによって構成されていますので、触媒化学の前田さんのご受賞は、異例ともいえるでしょう（しかし、圧倒的な成果ですので当然だと思います）。複合アニオンはこれまで固体物理では殆ど知られていませんので、加藤愛梨さん（内本先生の学生）のポスター賞の受賞とともに、認知してもらおう良いきっかけになったと確信しています。

本領域では、アウトリーチ活動も積極的に進めていきま

す。研究の醍醐味を一般の人にも伝えましょう。添付した絵は、10月に行なった出雲学校（小生の母校）の一年生向けの講演で使ったスライドで、勉強（受験勉強）と研究の違いを表したつもりです。研究が進むにつれ、道がどんどんでき、最後には整備される（左図）わけですが、複合アニオンの研究は、まだ足跡のない未開の山といえるでしょう。今後5年間、みんなで道無き道を進んでいながら（迷いながら）頂点を目指して登っていき、基礎学理を構築しましょう！！

勉強



研究

